

ある水文学者のクロノロジー

山 本 莊 毅

はじめに

立正大学を昭和六〇年三月末に停年退職する文学部教員の略歴・プロフィールについては本号にその記載がある。私の場合には高野史男教授が執筆して下さる由であるが、楽しみであり反面その御苦勞に感謝・脱帽する次第である。

私の「履歴」については、私自身がよく知っており、冷酷で乾ききった活字が示す記録よりも温陽で潤いのあるエピソードも欲しいものである。しかし、「論叢」という名のいかめしい出版物で回顧録的あるいはエピソード的なものが許されるだろうか。私は深く思い悩んだ。結論として退職教員については、例外として「雑文」もお許し頂ける、否許して頂きたいと念じつつ筆を執った次第である。

科学者としての「山本莊毅観」や一人としての「山本莊毅像」は私以外の人が書くべきである。ここで一言だけ自分自身について言及しておけば物心ついてからの私は常に科学者になりたいと念じていた。教育者になりたい（教育者であるということとは別問題）とも思わなかったし、軍人にも、政治家にも、まして商人になろうと思ったこと

はなかった。そして、他人に対しては親切にすることを生涯のモットーとした。私の尊敬する偉人は郷土出身の二人で、情熱の日蓮上人と努力の伊能忠敬である。

本文では、まず自分の研究業績について概観し、次に略歴について述べる倒叙的方法をとることにした。

1 業績について

科学者の学問的業績は何をメジャーとして測定すべきであらうか。私は戦後から自分の執筆した研究論文・報告書・その他の雑文を全て記録し年度末に集計することになっていた。だから私の還暦記念会や筑波大学停年退職祝賀会では役員に迷惑をかけることなく、小冊子にまとめることができた。ただし、戦前に書いた多くの思い出深い踏査・調査報告書については正確な年月がわからないので収載してない。

このような現況からすれば、記録は必ずしも完璧と言えないが一応の集計を試みてみた。集計の結果は第一表に示

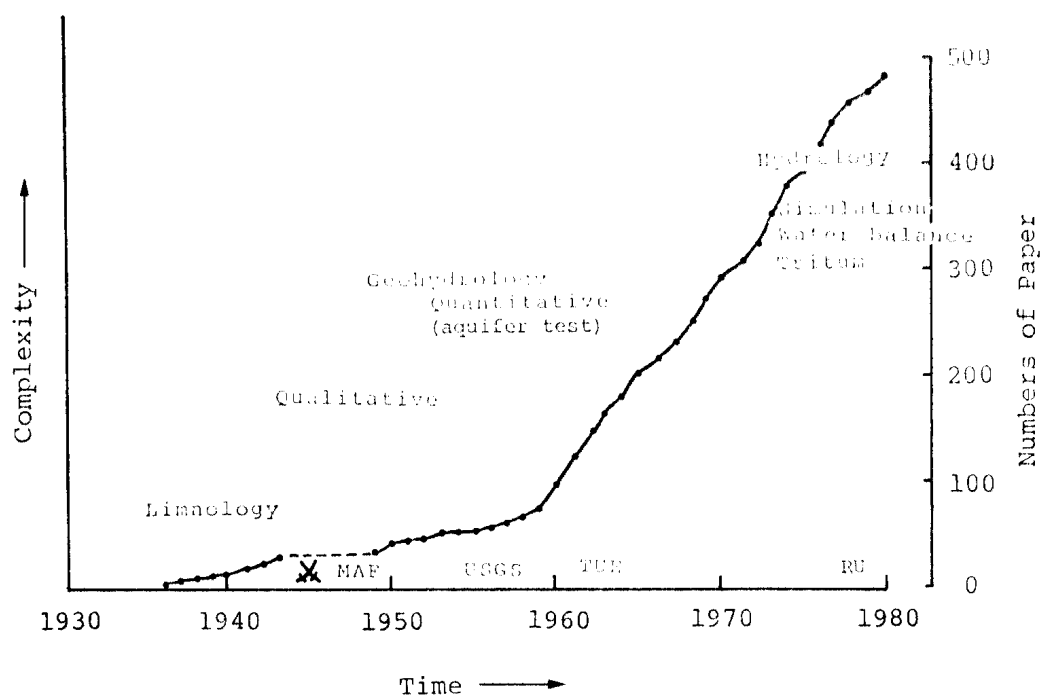
第1表

年	論文数	年	論文数
1936	2	1961	17
1937	3	1962	17
1938	2	1963	19
1939	1	1964	20
1940	3 (11)	1965	19 (92)
1941	4	1966	15
1942	7	1967	17
1943	6	1968	20
1944	0	1969	15
1945	0 (17)	1970	21 (88)
1946	0	1971	21
1947	0	1972	21
1948	2	1973	16
1949	4	1974	33
1950	6 (12)	1975	14 (105)
1951	1	1976	22
1952	1	1977	24
1953	7	1978	15
1954	7	1979	14
1955	0 (16)	1980	15 (90)
1956	1	1981	14
1957	4	1982	14
1958	6	1983	16 (44)
1959	7		
1960	29 (47)	総数	522

すようなもので、単に数字の羅列だけでは理解し難い面もあるのでこれを図化し、多少その内容も示しておいた。

科学者の科学への貢献は、単に論文の数だけではない。数量よりも内容にあることは言をまたないことである。しかし、凡庸の身であつてみれば量から質への転換を期待するほかはなかったのである。(第一図)

これを見るとアメリカ合衆国地質調査所から帰国して二・三年経ってから急速に論文がふえ始めている。数量の累積を示す成長曲線は現在でも成長をつづけているのが現状である。これを内容的にみると最初は湖沼学 (Limnology)・満鉄時代から地下水学 (Geohydrology) と水文地質学 (Hydrogeology) に変る訳であるが、この内容は初期の記述的・定性的なものから実用的・定量的なものへと変化をしている。最後にユネスコによる IHD、IHP 運動への参加として水文学 (Hydrology) に転向したが、これも地下水を中心とした水文学で水収支 (水循環)、トリチウムによる年



第1図 山本荘毅における研究業績とその内容の変化
(Increasing sophistication and Numbeers of Paper of S. YAMAMOTO, MAF: Ministry of Agriculture and Forestry, USGS: Geological Survey, TUE: Tokyo University of Education and RU: Rissho University)

代測定やシミュレーションなどが中心課題となり今日に及んでいる。

これらの業績を通じて私の貢献は何であったかを自省してみた。多少・自画自賛の謗はまぬがれないが次のようになる。(1)地下水学の近代化をまず挙げることができる。U・S・G・Sから「地下水学の知識は全くない」といわれた時代から黄金時代とまでもゆかないが、今日の盛況を築きあげた。筆者の「地下水調査法」は米国留学の直前に完成したが、正に洛陽の紙価を高からしめ、湯浅明氏の科学史年表地理の部に恩師吉村信吉の湖沼学、福井英一郎の気候学と並べ記されているのは感激であった。(2)も近代化の一部であるが揚水試験に「非平衡式」を導入し、T・Sの概念を普及したことは大きな技術革新である。(3)は探査技術の革新であるが、地下水調査に電気探査・地震探査・検層技術を導入した。(4)としては地盤沈下等を通じて国際交流の中心となったことで、米・英・ソ連・オランダ・ハンガリー・フランスや国連に知己を多くつくった。(5)として地下水学の普及化があげられる。現在日本の地下水研究者の中には少く共百人の山本スクール卒業生がいる。ただ、これらは研究者、技術者で、一般大衆でないことに反省の余地がある。私は日本では「地理学者」として禄をはんでいるから、地理学（研究連絡委員会や地誌研の創設、IGCを通じ）を始めとして、地図学（地理研・地図分科の創設）、第四紀学（研連の創設）等にも格別の貢献をした積りである。

2 地理学事始め

私は大正三年五月一日に千葉県海上郡豊浦村辺田十二番地（現銚子市春日町）に生まれた。大戦後の好況時代である。小学校時代は虚弱児で優等賞は貰ったが皆勤賞はあまり貰っていない。歴史学に興味を持ち、天皇の名前と年号を暗記した。

銚子に中学がなかったので、八日市場に新設された県立匝瑳中学校に通った。朝四時に起きて夜七時に帰宅する汽車通学であった。銚子から四人の同級生と通ったが今は一人も残っていない。ここでの地理は長谷川勝一（広島）・井土梅吉（立正？）・古沢三郎（京大）の三先生に習ったが興味は持てなかった。むしろ歴史の篠丸頼彦（香川で石川与吉氏と同級）先生や国語の秋葉環先生にひかれる。

当時は大不況時代が始まり、日支事変が始まろうとしていた。あまり気が進まなかったが卒業後千葉県師範学校二部に入學。二年の寮生活で先生（の卵）というものの表と裏、人生の生き様を学んだ。地理を吉田保治先生に学び、尾崎虎四郎さんの名前を知った。同氏の房総の地誌を買って読んだ。この年東京文理大卒の幸田清喜先生が赴任した。私のクラスは授業を受けなかったが、大変な評判で私は自宅に伺い、大いに激励された。ある日、文理大の青野寿郎氏が学生をつれて九十九里の巡検にくる。「頼んであげるから一緒に行ってみたら」ということで欣喜雀躍その日を待ちこがれた。どこでおち逢ったか忘れたが一日中お供をして、地図の読み方、野外調査のやり方を教わった。この時知りあったのが藤田（合田）栄作、塚越正佳、小出武の諸氏で、塚越さんからはその後も御指導を頂いた。ここで私は東京高師（当時陸士・海兵と共に最大難関校）の受験を決意した。

昭和九年四月東京高師文科四部（地理・歴史専攻）に入學、当時の同級生で地理を専攻した主な方には高野史男、原真、小栗宏、山鹿誠次、木谷正夫、班目文雄の諸君がいる。

東京高師には思い出の深い先生が沢山いるが専門学科で日本史の峰岸先生、西洋史の中川先生らの講義はガツカリ、東洋史の中山先生に至っては十八史略の棒読みで言語同断といったかった。私が期待していた田中啓爾、内田寛一両先生の講義は殆んどなく、自然地理の今村学郎先生、福井英一郎先生の講義は熱心で内容も興味があった。しかし、余程勉強をしないととてもついてゆけなかった。田中先生は先生にペコペコしない学生を見向きもしなかったが

今村先生の場合には優秀な学生以外を見向きもしなかった。田中・内田・今村の三先生はお互に仲が悪く学生は非常に困った。

3 陸水学事始め

私の生涯における重大な転機が東京高師二年の時に訪れた。幸田さんの影響で「工業立地論」を専攻しようと決心し、郷里「銚子市の醸造工業」を対象に選んだ。立地因子の分析で「水」に出合った訳である。当時、東京文理科大学には吉村信吉先生が講師としてきていたが実験室をもっていた。高師二年の私はおそろおそろ研究室のドアを叩き入門のお願いをした。

吉村先生は、丸い大きな目をキョトンとさせて困ったような嬉しような複雑な顔で研究室には自由に出入してよい、当分水質の分析を覚えるようにとのことであった。吉村先生は夜七時から八時頃まで仕事をしていたので自分も一緒にいて忽ちお手伝いできるまでに上達した。私の猛勉強が学友達に相当目ざわりであつたらしく、桐花寮の片隅に呼び出されて「今は基礎の勉強をする時だ、専門に入りすぎると将来伸びないよ」と忠告された。そうかも知れないと思つたがこの忠告は無視した。(私に好意的忠告をしてくれた良き友は五〇年経つた今でも基礎をやっているらしい)。

当時の私の仕事は、実験のお手伝い、先生のメチャクチャに書類の散らばった机上の整理と陸水学会の雑用であった。この辺の事情は陸水学会五十周年記念誌にのっているので述べないが、先生は会の庶務、集会、編輯の全てを研究の傍ら一人でやっていた。文理大図書館の下に食堂があつて今村学郎・福井英一郎・吉村信吉の三先生はいつも一緒に食事をしていたが、私も時々この席にはべらせて頂いた。

昭和十二年から東京文理科大学への入学資格に関する規則が変わった。旧制高校卒業生なみに東京高師三年修了でも

入学の出願ができるようになった。私は三年から受験しようとしたが田中啓爾さんから出願しないように言われた。理由はこの年先輩の受験者が多く私が受けると先輩が落ちるからという理由らしかった。私は受験し定員を大幅に上る全員の出願者が入学を許可された。

私のクラスメートは一番人数が多く、全員今もって健在である。桜井勝三、斎藤叶吉、坪内庄次、小出武、合田栄作、奥田久、築浦進一の諸君に私で全員が先輩である。社会的通念から言えば大学卒の年次で先輩、後輩はきまるが茗溪人事では東京高等師範学校、卒業の年次で先輩後輩がきまるからやりきれなかった。しかし、私の同級生である先輩諸氏は皆人格円満な金持ちで私の我儘を温い目で見守ってくれた。今でも感謝をしている。

大学生活三年間は私にとって試験の年であった。大学の入試合格通知を受けとって数日後に父が死んだ。弟妹六人と多額の借財を残して……。その上、私の過労がたたって結核になった。東高師三年の時、私はアテネフランセと上智大学（独語）の二校の夜学に通っていた。そして今度はアルバイト（家庭教師）を始めたからである。しかし、休学もせずに胡麻化してしまった。

この間に吉村先生の現地調査を手伝い、北は釧路の春採湖から南は池田湖まで廻って歩いたが、私の仕事はボートを背負ったり採水壘を持ったりの重労働であった。思い出としては、福井先生の気候学、吉村先生の湖沼学の校正をしたこと、文部省（東宝）映画「日本の湖」の撮影を手伝ったことである。私の興味は、地下水であったが卒業論文は「湖底堆積物に関する研究」であった。新婚間もない吉村先生の借家の隣に間借りをして卒論の指導を受けた。

昭和十五年三月の卒業生は文部省で定められた学校に就職をしなければならなかったが私は研究科に残ることにしたので配給を免れた。恐らく吉村↓多田（文男）↓小林（貞二）先生というルートで満鉄に入社した。満鉄には小林先生と同級生の三石鼎氏が水道課の現場にいてここに配属された。

この時、東大の奥村和夫、西村嘉助と一緒に入社することになったが、小林先生は巡検に連れていってくれて地質調査の特訓をしてくれた。西村君は調査部に私と奥村君は水道課に配属された。この年は満鉄創業三三年目に当たり、我々四百数十人は三々会を結成したが私はこの会の会長に選ばれている。

水道課には、上司に近藤利八（理・工学士）、山内敬信（理）さんがあり、このほか大場一夫と佐野俊智さん、後から入社した山田秋義さんという係であった。隣の調査係の下村節義さんや水質係の青山信彦・尾崎さんらとはすぐ仲よくなった。入社当時のロシア語、中国語会話の講習は非常にタメになった。

満鉄での仕事は現場の外業が多く、今まで本で読み実験室で習ったこととはまるでちがっていた。例えばパーカッションで掘った砂岩のコアを一生懸命に篩分けしてみても笑われたことなど等々。在来線の水源拡張・更新のほか新線建設予定地の水源調査を行った。私は主として小興安砦の湯旺河沿線を石井貞彰氏らと東辺道の濛江・撫松付近を遠藤秀友氏らと毎年調査をした。

調査は夏と冬が多かった。特に冬は河川が完全に凍結してよい道路になるからトラックが使用できた。夏は調査用具・寝具・テント・食糧などを苦力（クリー、中国人労働者）に背負わせて徒歩で行くが、冬の零下三〇度をこえる北満の調査は寒かった。フェルトの靴にと、がらしをひいて履くと寒くなかったがすぐ破れた。夏は早朝の露で着衣はビショビショ、日が昇ると蚊・ブトの大襲来に悩まされた。調査それ自身は(1)地質調査、(2)ボーリング調査などで(3)水質調査班が同行することもあった。

調査結果は必ず報告書として提出しているが現存していないと思う。終戦の時は白頭山麓で皇居予定地の水源調査を行っていた。終戦後、鴨緑江を筏で下り通化に出、撫順を経て約一ヶ月後の九月十七日帰宅したが調査隊の半分は途中暴徒に襲われて死んだ。

奉天では中国人・ソ連人による毎日の掠奪に逢ったが満鉄社員は胸章をつけ比較的保護された。会社では毎日書類の焼却が行われたが私は重要な書類を自宅に持ちかえり製図インクでトレーシングペーパーに書きこみ、ミシンで衣類に縫いこんで帰国した。これが東大に提出した私の学位論文のネタである。

終戦後、上司は身をかくしてしまい若年の私が中国政府の命令を受け中国政治文化研究所に徴用された。日本人が行った水道・水源開発事業に関するレポート書であったが、資料を焼かれてしまっていたので閉口した。帰国の際資料は勿論、写真一葉も持つことは許されなかった。

4 役人生活の一七年

昭和二十二年帰国を許され翌年農林省に奉職した。上司は堀田正弘さんで、引き揚げ組の小貫義男・蔵田延男氏らと調査課に配属された。調査課には地理出身の渡辺操さんがおり、多くの地理屋さんをアルバイトに使って開拓地の図上選定を行うなど活躍をしていた。私の仕事は地質担当であったが個人的に大変渡辺さんのお世話になった。

農林省での最初の仕事は終戦で外地から引き揚げた開拓民の入植地選定であった。米軍の指令で「適地調査の基準」作りに徹夜の毎日が続いた。文書を作るだけでなく現地調査も行った。開拓地の水源調査も行ったが、いずれも予算が少く現地には気の毒であった。

当時の私にはもう一つの仕事があった。どんなきつかけか忘れたが、GHQの中にあったNRS（天然資源局スケック局長）の水関係の連絡係となったことである。農林省は課長クラスが呼びつけられていたが先方の質問に的確な返事ができなかったらしい。地表水担当はジョージ平島（二世）で地下水担当はW・M・ブラッシェアースであった。平島や日本人職員は虎の威を借り横暴であったがブラッシェアースは人格者であった。

私が一九五六年（昭和三十一年）アメリカ合衆国地質調査所に国連技術援助第一号として留学できたのはブラッシーアースさんの推薦もあったと思う。彼がG・H・Qに提出したレポートによれば、日本人技術者に「地下水の知識は皆無」であったからである。まずニューヨークの国連本部に赴き次にワシントンのUSGS本部でA・N・セイル課長にあい、ルイジアナ・テキサス・コロラド・ユタ・カリフォルニアの各州を一月位づつ廻り・ハワイで一週間滞在して帰国した。

爾来、現在までUSGSとは連絡があり Water Supply Paper を送ってくれているが、A・I・ジョンソン、J・ポーランド、J・キャラハンやK・タカサキなどとは密接な連絡がある。特別な課題として「地下水の人工涵養」を研究したが今だにこの成果は日の目を見ていない。

帰国後のドクター山本（昭和二十七年私は満州の地下水の水理地質学的研究で東京大学・地質から理博を貰った）益々渉外の仕事が多く、愛知用水牧尾ダムや八郎潟の調査で、海外技術転移の窓口となった。行政事務としては畑地帯地下水調査という大型予算の確立、地質地下水係（後に班に格上げ）の創設等が特筆され、技術革新としては電気探査、弾性波探査、検層技術、揚水試験における非平衡法の導入などが挙げられる。

農林省十七年間の行政官生活には多くの思い出がある。農林当局は都合のよい時には私の学位を評価したが、昇格昇級に関しては無視したことである。当時、私は農地局で唯一の学位所有者であったが辞める直前まで四等級で課長・部長に昇進させなかった。冷酷無比と思っているが伊東正義氏（衆議院議員）だけは「すまない」といていた。御都合主義の第二は私が新潟地盤沈下調査事務所長に任命されたことである。現場の所長ポストに理学部出身者が任命されたことはなく、将来もないだろうが当時農林省は農地の地盤沈下で困っており調査事務所の新設をきめていた。しかし、所長として通産・建設・運輸・科技など諸省庁の論客と対等に対抗できるコマがなかった。本省では私

の任命に猛烈に反対したが北陸の局長山根登一郎氏と次の局長下川善之氏の強力なサポートがあつて私が任命された。(3)地沈の初代所長として私は万全の調査体制をひいた。「日さく」の橋本正毅氏の協力をえて「スライド式沈下計を完成し、その他の業績から私は現在でもユネスコ本部のIHPワーキング・グループのメンバーであり、地盤沈下に関する国際会議を三回も主宰した。私の上司堀田正弘氏は完全な行政官で責任をとることを極端に嫌った。従つて役所の業務として調査したことを発表するのを極端に嫌った。私はこれを守ったが部下には強制しなかった。農林省の地質官は研究調査の業績を多く持っているが発表の機会に恵れないのは未だにこの伝統があるのかも知れない。

私には大学転進のチャンスがいくつかあった。関係者が存命なのでなるべく人名を挙げないようにするが東北大に二回のチャンスがあった。これらには田山利三郎さん・花井重次さん・渡辺光さん(いずれも故人)の御尽力があつた。ある事情で沙汰やみとなつたが次は日本大学文理学部から御招きがあつた。飯本信之さんから応用地学科新設の主任教授ということで文部省に申請したいという打診で私はOKをした。丁度その時東京教育大学で水文学科創設の準備が着々と進められ、割愛申請がきてしまった。人事問題ということで事前の交渉がなかったのである。

水文学科はできず、水収支論講座一つということになったが、この開設には石川与吉先生の献身的な努力があつた。この記録、尽力をお願いした人々の名刺などはノート二冊に克明に整理されておりこの現物は私が持っている。このようにして市川正巳助教授・古藤田一雄および榎根勇(当時カナダ留学中)の両助手で水文学の講座はスタートした。

5 大学教授の一四年とまとめ

東京教育大学時代の私に関しては教育大教室報告に述べた。私の講義をきいた学生は最初、大獄幸彦(現上越教育

大)と木崎昭子(現岩尾・尚綱高)の二人であった。しかしその後数が増加、私のゼミに一番優秀な学生がくるようになった。平田重夫はその一人である。私による学位授与者の数は教育大地理では一番多く青野寿郎氏をぬいた。筑波大学、立正大学に関する事項は今述べる時ではないと思うのでやめる。次に非常勤講師歴について列挙する。

昭和二二・四―二四・三

法政大学講師(工学部)

昭和二二・十一―二五・三

東京高等師範学校講師(地理)

昭和二八・六一―三七・三

東京大学(理学部)

昭和三七・四―四一・三

日本大学(文理学部)

昭和三九・六一―三九・九

金沢大学(法文学部)

昭和四〇・四―現在

東京成徳短期大学理事兼講師

昭和四〇・六一―四一・三

広島大学(文学部)講師

昭和四三・六一―四五・六

ホンコン中文大学教授（校外）

昭和四六・四―四九・三

東京大学（工学部）講師

昭和四六・四―四七・三

北海道大学（理学部）

昭和四六・六―四九・五

シンガポール南洋大学教授（校外）

昭和四七・四―四八・三

広島大学（文学部）講師

昭和五一・四―五三・三

立正大学（文学部）講師

昭和五五・一―五七・三

千葉大学（理学部）講師

ここで私の研究歴を総括しておく。第2表のようになる。この表と第1図を対比して見て頂けば一目瞭然となるが、私の研究生生活が飛躍的に変化をするのは合衆国地質調査所（U・S・G・S）の留学を契機としている。恵まなかった行政官生活も学位・留学それに新潟地盤沈下調査事務所長という研究的な雰囲気や契機に好ましい方向へと進んで行った。大学教授という地位もすぐれた助教授・助手・学生に恵まれて順調に研究を行うことができた。次第に学会での中心的存在となり、政府・都県などの審議会委員も兼ねることになった。分刻みのスケジュールに追われ

第2表 山本荘毅の研究歴と学界・社会事象 (Historical record of S. YAMAMOTO and social phenomena)

職 歴	学 協 会 関 係	主 な 著 書	学 協 会	社 会 事 象
1914 誕生	1950 フンガウル (G HQ) に	1953 地下水調査法	(1887 東京地学協会) (1893 日本地質学会) 1913 KK日さく (1924 日本地理学会)	1914~'19 第一次大戦 1941~'45 第二次大戦
1940 文理大卒満鉄	52 理学博士(東大) 56 U. S. G. S 留学	59 電気探査の土木 地質学的研究	1931 日本陸水学会 1948 物理探鉱協会 1948 地質地下本班 (農林省) 1950 防災研究所(京大) 1956 水利科学研究所 1957 河川水温調査会 1959 日本地下水学会 1960 応用地質学会	1950~'54 朝鮮動乱
47 引揚				
48 農林省入省	1965 四紀学会々々長	1962 地下水探査法	1948 地質地下本班 (農林省) 1950 防災研究所(京大) 1956 水利科学研究所 1957 河川水温調査会 1959 日本地下水学会 1960 応用地質学会	1955 深井戸急増 55 国連原子力 平和利用 56 工業用水法 57 J R R-1 臨界
1960 新潟地沈所長	68 中文大教授 (ホソコソ)	68 揚水試験と井戸 管理	1956 水利科学研究所 1957 河川水温調査会 1959 日本地下水学会 1960 応用地質学会	
63 教育大教授				
1970 学術会議会員 (8.9.10期)	1971 南洋大教授 (シンガポール)	1971 陸水	1967 ハイドロロジー 談話会 1967~'69 特定研究 「水文学」 1969 地盤沈下国際 シンポジウム 1970~'72 特定研究 「水資源」 1971 I A H アジア 地域会議 流域水管理国際 シンポジウム 1977 水資源 シンポジウム 1980 I G C 1984 水文研究会	1960 所得倍増 64 新幹線 65 ビル用水法 67 人口一億
71 中央公害対策審	72 I G U 首席代表 (カナダ)	71 扇状地の水循環	1967~'69 特定研究 「水文学」 1969 地盤沈下国際 シンポジウム 1970~'72 特定研究 「水資源」 1971 I A H アジア 地域会議 流域水管理国際 シンポジウム 1977 水資源 シンポジウム 1980 I G C 1984 水文研究会	
74 原子力原子炉安 全審査	75 地理学会々々長 ユネスコ IHP. W. G メンバー	72 水文学総論	1969 地盤沈下国際 シンポジウム 1970~'72 特定研究 「水資源」 1971 I A H アジア 地域会議 流域水管理国際 シンポジウム 1977 水資源 シンポジウム 1980 I G C 1984 水文研究会	
75 資源調査会	76 I G U 首席代表 (ソ連)	1976 最新地下水学	1971 I A H アジア 地域会議 流域水管理国際 シンポジウム 1977 水資源 シンポジウム 1980 I G C 1984 水文研究会	1970 万国博 78 成田空港
78 筑波大停年 立正大教授	80 I G U 首席代表 (日本)			
1985 立正大停年	80 I A H S 副会長	1984 新版地下水調査 法	1980 I G C 1984 水文研究会	1982 東北新幹線

ることもあるが、健康に恵まれてこれを消化していることは幸福である。

今回の退職を私の人生におけるピリオッドではなく、コンマとして、やり残した仕事を完成したいと思っている。御好誼に厚く感謝すると共に今後の御協力をお願いする次第である。

参考文献

- 1 銚子市立春日小学校百周年記念誌（一九八〇）
- 2 千葉県立匝瑳高等学校同窓会名簿（一九八四）
- 3 Brashers, M. L. (一九五四) 日本の地下水研究に関する現況と日本政府への勧告 (GHQ)
- 4 山本莊毅（一九七七）大塚学園における水科学の発展、地理学研究報告、XI
- 5 山本莊毅（一九七八）日本における水文学の発達、地理学評論五一―七
- 6 山本莊毅（一九八三）日本陸水学会創立五〇周年記念講演、陸水学雑誌四四―三

1 著書・編著等（一部執筆を除く）

- 昭和28年（一九五三）
地下水調査法、古今書院、一八〇頁
- 昭和34年（一九五九）
- 1 電気探査の土木地質学的研究、古今書院、一二五頁（志村と共著）
 - 2 地下水、畑地かんがい研究会、一五五頁（柴崎と共著）
- 昭和37年（一九六二）
- 1 地下水探査法、地球出版、三二五頁
 - 2 揚水試験と井戸管理、昭晃堂、二〇〇頁

昭和43年（一九六八）

陸水、地球科学講座九、共立出版、三四七頁（編）

昭和46年（一九七一）

扇状地の水循環―環境システム論序説―、古今書院、一五一頁（樞根と共著）

昭和47年（一九七二）

水文学総論、水文学講座一、共立出版、二二七頁（編）

昭和49年（一九七四）

国土と人権（西山・山崎と共編）時事通信社

昭和50年（一九七五）

英和・和英水文用語集 資源調査所

昭和51年（一九七六）

最新地下水（監修）山海堂

昭和58年（一九八三）

新版地下水調査法、古今書院、四九〇頁

2 主要論文目録

昭和11年（一九三六）

1 磐梯五色沼の湖沼学的予察研究（下）（吉村、根来と共著）、地理評12(2)、一二六～一五三頁

2 千葉市西北郊下総台地の地下水（吉村と）、陸水雑6(2)、七四～八四頁

昭和12年（一九三七）

1 磐梯五色沼の湖沼学的予察研究（補遺）（吉村、根来と）、地理評13(12)、一二四七～一二五二頁

2 市川市の地下水、陸水雑7(3)、八九～九七頁

3 ヨーロッパ以外の地域の工業化、地学雑誌581、三九五頁

昭和13年（一九三八）

- 1 千葉市西北郊登戸の地下水と地震 (吉村と)、震研彙報16(1)、二二二～二二七頁
 - 2 大磯町の地下水 (予報)、陸水雑8(1)、一四～二二頁
- 昭和14年(一九三九)

- 1 東京市の鑿泉水に含まれる化学成に就いて、陸水雑9(3)、一一五～一二三頁
- 昭和15年(一九四〇)

- 1 秦野盆地の地下水、地理学8(12)、一八七〇～一八七八頁
 - 2 浦和大宮台地地下水の地理学的研究、陸水雑10(3)・(4)、一九四～二〇一頁
 - 3 石灰岩地域の地下水、大陸之水道1(3)、二六～三二頁
- 昭和16年(一九四一)

- 1 海岸附近沼水中の塩化物の所謂正規分布、陸水雑11(1)、一四～二三頁
 - 2 再び千葉市附近下総台地地下水に就いて、地理(大塚地理学会)4(2)、二二七～二三七頁
 - 3 満州の地下水に就いて―その概観・問題―、地理学9(7)、九〇八～九一七頁
 - 4 一九四〇年地下水関係文献目録、大陸之水道2(1)、一～三頁
- 昭和17年(一九四二)

- 1 湖底堆積物の酸素吸収量(第一報)、地理評18(3)、一七七～一九九頁
 - 2 湖底堆積物の酸素吸収量―特にそれと湖沼型との関係について―(第二報)、陸水雑11(4)、一四六～一五〇頁
 - 3 割目と溶蝕孔の地下水、大陸之水道3(2)
 - 4 地球物理学的地下探査法、大陸之水道3(3)
 - 5 深井戸の寿命に就いて、大陸之水道3(4)
 - 6 満州国内にある最深湖龍灣の踏査、大陸之水道
 - 7 満州第二の深湖老湖龍灣其他の測深結果、科学12(5)、一九八～一九九頁
- 昭和18年(一九四三)

- 1 龍灣火口湖の湖沼学的予察研究、地理評19(1)、一七～二四頁
- 2 海岸及び島の地下水、大陸之水道4(1)

3 満州の陸水、大陸之水道 4 (2)、一〇五頁

4 ミネソタ州の地下水、大陸之水道

5 アグテレック洞穴系の地下水、大陸之水道

6 銚子市附近の地下水、地理学 11 (8)、六八七〜六九四頁

昭和 23 年 (一九四八)

1 満州に於ける最近の地史、科学 18 (1)、四一〜四三頁

2 水源を地下水に求める場合特に留意すべき事項について、水道協会雑誌 16、一〇〜二三頁

昭和 24 年 (一九四九)

1 銚子附近の被圧地下水―関東構造盆地地下水研究第一報―、地理評 22 (2)、六〇〜六六頁

2 地形と地下水、地球之科学

3 波根湖の干拓と地下水、陸水雑 14 (1)、一〜四頁

4 支那東北地方の切峰面図とそれから推定される二、三の事実、地質と鉱物 10、一五三〜一五六頁

昭和 25 年 (一九五〇)

1 アンガウル島地下水調査報告書 (田山と)、隣鉱開発 (GHQ)

2 地下水調査法の科学化に関する研究―第一報、調査地点の選び方について―、第二報、揚水試験について―、水道協会雑誌 188 三〇〜三四頁

3 地下水調査における観測点の選び方、田中啓爾先生還暦記念大塚地理学会論文集

4 日本における深層地下水 (第一報) 序論、陸水雑 15 (1)、(2)、七〜一七頁

5 河谷の地下水 (第一報) 矢作川拳母盆地の地下水について、地理評 23 (9)、二七五〜二八四頁

6 青い海・緑の島、農地文化 3

昭和 26 年 (一九五一)

1 河谷の地下水 (第二報) 紀川谷の地下水について、地理評 24 (1)、八〜一六頁

昭和 27 年 (一九五二)

1 Chemical composition of river water in Manchuria, Jap. Jour. Geol. & Geogr., XXII, 97〜107.

昭和28年（一九五三）

- 1 河谷の地下水（第三報）渡良瀬川畔の地下水について（小沢、片山、上原と）、地理評26(9)、四一二～四一七頁
- 2 日本の地下水温、地理学3一七～二二頁
- 3 人工地下水涵養の一般的原理、水道協会雑誌219、三四～三八頁
- 4 On the origin of chlorides content in the inland water of Angaul Is., 内田寛一
先生還暦記念地理学論文集（下）、四〇五～四一二頁
- 5 陸水学における最近の傾向について、地理評26(14)、六三四～六三八頁
- 6 On the ground water in Manchuria, 東亜地質鉱産誌（U. S. G. S.）.

昭和29年（一九五四）

- 1 日本の地下水、水道時報1(5)、一一～一五頁
- 2 " 水道時報1(6)、一〇～一一頁
- 3 千葉市近傍地下水調査報告書、千葉県
- 4 菅平大明神沢の毒水について、地理評27(2)、八四～八七頁
- 5 鬼怒川流域の地下水（予報）、（谷津、品田、星野、中村と）地理評27(6)、二六三～二六七頁
- 6 小千谷町における地下水の涸渇、東大地理学研究Ⅲ、一五七～一六七頁
- 7 地下水の開発とその調査、国土開発12、七～一一頁

昭和31年（一九五六）

- 1 ラジオアイソトープによる漏水の調査、農地95、96、六～一一頁

昭和32年（一九五七）

- 1 地下水の利用とこれに関する諸問題、農地116、一〇～一五頁
 - 2 日本における火山山麓の湧泉の温度、水温研究3(1)、一～四頁
 - 3 宙水について―その定義・地理学的意義―、地理2(10)、九六七～九七八頁
 - 4 地下水調査の際地盤高度を地形図から読みとる場合の精度について、地学雑誌66(4)、二二～三二頁
- 昭和33年（一九五八）

- 1 日本における火山山麓の湧泉、科学28(2)、九〇～九一頁
- 2 非平衡式による揚水試験、水道協会雑誌81、八～一二頁
- 3 地下水の人工涵養、水利科学2(1)、六二～六八頁
- 4 陸水学への招待、地理3(8)、一〇五一～一〇六一頁
- 5 電気探査における諸問題、藤本義治教授還暦記念論文集、三八五～三八九頁
- 6 汚水処理に関する一方策―汚水の地下分散方式を中心として―、都市問題49(12)、一三五三～一三五九頁

昭和34年(一九五九)

- 1 放射性追跡子による漏水調査、原子力工業5(8)、四七～五二頁
- 2 海岸地下水とくに砂洲の地下水について、地理評32(11)、五七九～五九四頁
- 3 The volcano slope springs in Japan, Proc. IGU Regional Conf. in Japan. 1957, 222～224.
- 4 関東地方の自由地下水面、地学雑68(4)、一六三～一七四頁
- 5 汚水の地下注入処理について、水利科学3(1)、五五～七一頁
- 6 “ぶっこみ法”について―ストップ・ウォッチとテープとドラムかんで出きる透水試験―、土地改良9(5)、二一九～二二二頁
- 7 地下水位の測定、地理5(10)、一二〇四～一二〇七頁

昭和35年(一九六〇)

- 1 地下水利用に関する新しい知識―人工地下水について(つづき)―、水2(1)、三二～三五頁
- 2 “ ” ―地下水保全区について―、水2(2)、二六～二八頁
- 3 “ ” ―地下水紛争について―、水2(3)、一七～一九頁
- 4 “ ” ―アメリカの地下水調査について―、水2(4)、一七～一九頁
- 5 流線網から透水係数を求める方法について、陸水雑21(3)、(4)、三三五～三三八頁
- 6 地下水利用に関する新しい知識―アメリカの井戸掘り―、水2(5)、二五～二七頁
- 7 八郎潟における地下水調査、応用地質1(2)、一～三頁
- 8 漏水調査におけるR I利用、応用地質1(2)、六～九頁
- 9 廃水の注入処理について、日本化学工業8、二八～三〇頁

10	地下水利用に関する新しい知識—電気検層について(その一)—、水2(6)、二五〇二七頁
11	地下水利用に関する新しい知識—検層について(その二)—、水2(7)、二二〇二三頁
12	地下注入処理法、化学工場4(8)、四一〇四四頁
13	新しい地下水学—井戸のスクリーンについて(その一)—、水2(8)、一八〇二〇頁
14	地下水の人工涵養についてその(I)—外国における事例を中心として—、用水と廃水2(8)、五六五〇五七〇頁
15	その(II)—
16	その(III)—
17	新しい地下水学—地下水温度と温度検層(その一)—、水2(10)、二二〇二四頁
18	その(二)—、水2(11)、二一〇二三頁
19	その(三)—、水2(12)、二三〇二九頁
20	地下水に関する新しい知識(まとめ)、水、特集号
21	地下水学の術語について、応用地質1(4)、九一〇四頁
22	人工地下水—水質源対策の一方法—、農地4、一七〇二二頁
23	農地5、二八〇三二頁
24	農地6、一一〇一七頁
25	農地7、一七〇二二頁
26	農地8、一六〇二〇頁
27	農地9、一七〇二〇頁
28	日本の地下水、水道時報1(5)、(6)、一一〇一五頁、一〇〇一二頁
29	乾燥地帯と地下水、I・E・C・15、八〇一三頁
昭和36年(一九六二)	
1	Development of ground water utilization, ECAFE, 1~5.
2	廃液の地下処理について(1)、水処理2(7)、六一〇六六頁
3	水処理2(12)、二五〇二八頁

4	水資源と地盤沈下、地理6(8)、八九〇～八九五頁
5	地下水の大規模採水について、工業用水35、一五～一九頁
6	日本の地下水―北海道地方(1)、総説、水3(1)、三三～三六頁
7	" (2)、特徴、水3(2)、二四～二七頁
8	" (3)、地域別各論、水3(3)、二〇～二三頁
9	" (4)" 水3(4)、二四～二七頁
10	" (5)" 水3(5)、二八～三一頁
11	" (6)" 水3(6)、二八～二九頁
12	" (7)" 水3(7)、六三～六六頁
13	" (8)" 水3(8)、二〇～二二頁
14	" " 水3(9)、二二～二五頁
15	" 最終回 水3(10)、二八～三一頁
16	" 東北地方(その一)、水3(11)、二五～二九頁
17	" (その二) 水3(12)、二九～三三頁
昭和37年(一九六二)	
1	流線網から透水係数を求める方法、水道協会雑誌30、三二～三五頁
2	農用地下水利用の現況とその地学的成立、水利科学6(1)、一～一三頁
3	適正揚水量と比湧水量について、工業用水44、一四～一七頁
4	阿蘇火山西麓台地の水理地質―日本の深層地下水(第一報)―(宮本・柴崎・畠山と)、地質雑68、二八二～二九二頁
5	地下水の動態―関東平野を例として、科学32(12)、六四三～六四九頁
6	日本の地下水―青森県(1)、水4(1)、六四～六七頁
7	" (2)、上北地方(1)、水4(2)、六四～六七頁
8	" (3)、" (2)、水4(3)、六二～六七頁
9	日本の地下水―青森県(4)、八戸地方(1)、水4(4)、六二～六七頁

10	日本の地下水―青森県(5)、八戸地方(2)、水4(5)
11	〃
12	〃
13	〃
14	〃
15	〃
16	〃
17	〃
昭和38年(一九六三)	
1	地下水紛争について―千葉市幕張町の例―、水処理4(1)、五三―五六頁
2	地下水紛争について、水利科学6(6)、一六―二六頁
3	放射性廃棄物の地中処理について―外国における実施例―、用水と廃水5(3)、一六五―一七四頁
4	揚水試験における回復法について、地下水と井戸とポンプ5(5)、一四三三―一四三六頁
5	山形県蔵王毒水の地下水処理について(予報)(室井、中島と)、水処理4(7)、九―一六頁
6	扇状地の地下水、地理8(10)、一〇九一―一〇九六頁
7	日本の地下水―岩手県(1)、総説、水5(1)、六八―七一頁
8	〃
9	〃
10	〃
11	〃
12	〃
13	〃
14	〃
15	日本の地下水(30)―秋田県(1)、総説、水5(9)、七四―七五頁
16	日本の地下水―秋田県(2)、水5(10)、七〇―七三頁

- 16 日本の地下水―秋田県(3)、横手盆地の地下水、水5(1)、七一―七三頁
- 17 " " (4)、横手盆地湯沢扇状地、水5(2)、七一―七三頁
- 18 " " (5)、秋田市周辺地域、水5(3)、七〇―七三頁
- 19 " " (6)、寒風火山の湯泉について、水5(4)、七〇―七三頁

昭和39年(一九六四)

- 1 水配分から見た産業立地、工業用水64、一二―一三頁
- 2 陸水学の体系について、水利科学7(6)、一三六―一四二頁
- 3 被圧地下水の賦存量に関する考え方、水処理技術5(2)、一―五頁
- 4 最近の水に関する国際会議の動向、用水と廃水6(4)、二六九二―七二頁
- 5 宙水の形成について、東京教育大地理学研究报告Ⅷ、一―一〇頁
- 6 ハイドロロジー、農業土木研究32、一七三頁
- 7 不圧水の賦存量について、水処理技術5(1)、一―四頁
- 8 福島盆地の地下水面、東北地理16(4)、二〇四頁
- 9 日本の地下水―秋田県(7)、八郎潟南部、水6(1)、七六―七九頁
- 10 " " (8)、八郎潟西辺の地下水、水6(2)、七一―七三頁
- 11 " " (9)、八郎潟東岸の地下水 水6(4)、七二―七三頁
- 12 日本の地下水(40)―秋田県(10)、八郎潟東岸の地下水その2、八郎潟における地下水(総括)、水6(5)、七一―七三頁
- 13 日本の地下水―秋田県(11)、大館盆地の地下水、水6(6)、六六―六七頁
- 14 " " (12)、大館盆地の地下水紛争、水6(7)、七〇―七二頁
- 15 " " (13)、鷹巣盆地の地下水(1)、水6(8)、五九―六一頁
- 16 " " (14)、 " (2)、水6(10)、六六―六八頁
- 17 " " 山形県(1)、総説、水6(11)、六九―七一頁
- 18 " " (2)、総説、水6(10)、七四―七五頁
- 19 " " (3)、米沢盆地、水6(13)、六七―六九頁

- 20 日本の地下水—山形県(4)、米沢盆地、水6(14)、七一〜七三頁
- 昭和40年(一九六五)
- 1 ファイリッピンにおける地下水開発、用水と廃水7(3)、一五六〜一六一頁
- 2 河谷の地下水(第四報)—広島県芦田川河谷の地下水について—、東京教育大地理学研究報告IX、二六一〜二六九頁
- 3 草原の畑地かんがい、地理10(3)、一五〜二〇頁
- 4 第四紀と応用地学、第四紀研究4(1)、一〜四頁
- 5 地下水堆、農業土木研究33(5)、二〇九頁
- 6 宙水、農業土木研究33(6)、二六八頁
- 7 Ground water hydrology of river valley (abstract), Proc. IAH (German section)
- 8 Studies on the hydrology of fractured rocks in Japan, IASH, Symposium of Dubrovnik 1965, 340〜342.
- 9 日本の地下水—山形県(5)、上山盆地、水7(1)、六八〜七〇頁
- 10 日本の地下水(5)—山形県(6)、上山盆地、水7(2)、六七〜六九頁
- 11 " — " (7)、村山盆地、水7(3)、六九〜七一頁
- 12 日本の地下水—山形県(8)、山形扇状地、水7(4)、五九〜六一頁
- 13 " — " (9)、山形扇状地、水7(5)、七一〜七三頁
- 14 " — " (10)、乱川扇状地の地下水、水7(6)、六七〜六九頁
- 15 " — " (11)、乱川扇状地の地下水2、水7(7)、七五〜七七頁
- 16 " — " (12)、" 水7(8)、七四〜七六頁
- 17 " — " (13)、水7(9)、七〇〜七二頁
- 18 " — " (14)、庄内地方の地下水、水7(11)、七二〜七五頁
- 19 " — 福島県(1)、総説、水7(12)、七四〜七五頁
- 昭和41年(一九六六)
- 1 外国における水の研究体制について、地理評39(3)、二二四〜二二五頁
- 2 General view of hydrology in Japan Japanese Geography 1966—its trends, 37〜42.

- 3 Formal discussion paper 1—14, Underground movement of Nitrogen, Third ICWPR (Germany), 1.
 - 4 日本の地下水(60)―福島県(2)、気候とくに降水について、水8(1)、六九〇七二頁
 - 5 " ― (3)、福島盆地、水8(2)、三八〇三九頁
 - 6 日本の地下水―福島県(4)、福島盆地、水8(3)、七二〇七六頁
 - 7 " ― (5)、棚倉・浅川地区について、水8(4)、七〇〇七三頁
 - 8 " ― (6)、郡山市と白河市、水8(5)、七一〇七三頁
 - 9 " ― (7)、会津盆地および会津西部山地と白河市、水8(6)、七二〇七六頁
 - 10 " ― (8)、浜通りと原町市、水8(7)、七〇〇七三頁
 - 11 " ― (9)、浜通り、水8(8)、七三〇七六頁
 - 12 " ― 宮城県(1)、総説、水8(9)、六九〇七一頁
 - 13 " ― (2)、大崎平野、水8(10)、六四〇六八頁
 - 14 " ― (3)、仙台付近、水8(11)、六九〇七一頁
 - 15 " ― (4)、仙台付近、水8(12)、六九〇七一頁
- 昭和42年(一九六七)
- 1 ハンガリーにおける水文学の調査と研究、水利科学10(6)、九〇〇一〇一頁
 - 2 河谷の地下水(第五報)―特に三重県三滝川河谷の地下水について―、東京教育大地理学研究报告X、一四七〇一五八頁
 - 3 火山山麓の水理地質学的特性―特に帯水層単元確立の必要性―(猿山・熊井・高橋・宮本・柴崎・大野と)、柴田秀賢教授退官記念論文集、三五〇〇三五三頁
 - 4 満州の地下水の水理地質学的研究、水道公論3(8)、九八〇九九頁
 - 5 Groundwater hydrology of river valley (Congress in Hannover, 1965), AIH Mémoires VII, 357~359.
 - 6 水収支、北伊勢地盤沈下調査報告書、一三三〇一四三頁
 - 7 IHD計画と日本における協力体制、水温の研究10(6)、四〇八頁
 - 8 IHD計画について、ハイドロロジー1、二〇七頁
 - 9 日本の地下水―宮城県(5)、仙台付近、水9(1)、七三〇七五頁

- 10 日本の地下水―関東地方総説1、水9(2)、六九〇七二頁
 - 11 " " 2、水9(3)、六九〇七一頁
 - 12 " " 3、水9(4)、七〇〇七二頁
 - 13 " " 4、水9(5)、六三〇六五頁
 - 14 " " ―千葉県(1)、九十九里浜、水9(6)、六一〇六二頁
 - 15 " " (6)、房総南部、水9(11)、七〇〇七二頁
 - 16 " " (7)、千葉付近、水9(12)、七四〇七六頁
 - 17 " " (8)、船橋付近、水9(13)、七三〇七五頁
- 昭和43年(一九六六)
- 1 処理下水を使った地下注入実験(訳)、水処理技術9(2)、五三〇五五頁
 - 2 中部圏の水源―特に地下水源について、地理評41(2)、九八〇九九頁
 - 3 首都圏における河川および地下水の収支に関する水文学的研究No.1、科研費(特定・水文学)
 - 4 東郷池の干拓が松崎・東郷・浅津の諸温泉におよぼす影響について(瀬野・木内・清水と)、陸水雑29(1)、一〇一二頁
 - 5 中性子水分計のキャリブレーションについて(榎根・平田と)、東京教育大地理学研究報告Ⅻ、八五〇一〇二頁
 - 6 水理定数を求めるための簡便法、地下水と井戸とポンプ10(6)、三六七八〇三六七九頁
 - 7 水資源対策としての地下水、都市問題59(6)、五二〇六三頁
 - 8 地下水はどの位あるか、地理13(8)、七〇一二頁
 - 9 Current studies on hydrology in Japan, 地理評41(1)、七〇四〇七一頁
 - 10 Influence of human activities on the hydrologic cycle, First Rep. of the IGU Commission on the IHD, Freiburger Geographische Heft 6, 15~24.
 - 11 日本の地下水―千葉県(9)、佐原成田、水10(1)、六四〇六六頁
 - 12 " " (10)、西部、水10(3)、六六〇六八頁
 - 13 " " (11)、小見川佐原、水10(4)、七〇〇七一頁
 - 14 " " (12)、京葉工業地帯、水10(5)、六六〇六八頁

- 15 日本の地下水―千葉県(13)、北西部、水10(6)、五九〇～六一頁
- 16 " ― 茨城県(1)、総説、水10(7)、六八〇～七〇頁
- 17 " ― (2)、那珂台地、水10(8)、七〇〇～七二頁
- 18 " ― (3)、水戸台地、水10(9)、六八〇～七〇頁
- 19 日本の地下水―関東地方特別補遺、水10(10)、五九〇～六一頁
- 20 日本の地下水―茨城県(4)、鹿島半島、水10(11)、六一〇～六三頁

昭和44年(一九六九)

- 1 首都圏における河川および地下水の水収支に関する水文学的研究No.2、科研費報告
- 2 日本における火山体の水資源的価値に関する研究No.1、科研費報告
- 3 河谷の地下水(第六報)―特に庄内川河谷の地下水について―、東京教育大地理研究報告XIII、五三〇～六四頁
- 4 地下かん養の経済学(肥田と共訳)、用水と廃水11(9)、七五二～七六〇頁
- 5 扇状地の地理―那須野の地下水―、村田貞蔵先生還暦記念論文集
- 6 日本の地下水―茨城県(5)、水11(3)、七〇〇～七二頁
- 7 " ― (6)、筑波学園都市および土浦周辺、水11(4)、五三〇～五五頁
- 8 " ― (7)、新利根、水11(5)、五三〇～五五頁
- 9 " ― 茨城県(8)、日立市、水11(6)、七三〇～七五頁
- 10 " ― (9)、日立市、水11(7)、六八〇～七一頁
- 11 " ― 栃木県(1)、総説、水11(8)、六三〇～六五頁
- 12 " ― (2)、水理地質について、水11(9)、六八〇～六九頁
- 13 " ― (3)、鬼怒川流域、水11(10)、五三〇～五五頁
- 14 " ― (4)、宇都宮周辺、水11(11)、二三〇～二五頁
- 15 " ― (5)、那須野原、水11(12)、六六〇～六八頁

昭和45年(一九七〇)

- 1 地下水の揚水試験、農業土木研究37(9)、三六〇～四〇頁

- 2 第二次大戦後、官庁における地理出身者の活動について、現代の地理学（渡辺光教授退官記念会）、三二七～三四〇頁
 - 3 富士山の水文学的研究―火山体の水文学序説、地理評43(5)、二六七～二八四頁
 - 4 日本における地下水の開発に関する諸問題と保全について、科技庁資源調査所
 - 5 地下水の大規模揚水について、地下水と井戸ポンプ12(1)
 - 6 Simulation of groundwater balances as a base of considering land subsidence in the Koto Delta, Tokyo (榎根・青木・富士と)・Land Subsidence, IASH Publication 88, 215～224.
 - 7 地下水資料の精度について、現代日本の地下水研究、(酒井軍治郎退官記念会)、一～九頁
 - 8 東京都深層地下水に含まれるトリチウムについて、都土木研
 - 9 地盤沈下とその研究―一九六九年東京開催の国際シンポジウムの成果を中心として―、地学雑78(7)、四七一～四八二頁
 - 10 日本の地下水―栃木県(6)、日光市、水12(1)、六二～六五頁
 - 11 " " (7)、今市扇状地、水12(2)、三二～三四頁
 - 12 " " (8)、今市扇状地、水12(3)、三五～三七頁
 - 13 " " (9)、栃木県南地方、水12(4)、六六～六八頁
 - 14 " " (10)、集水暗渠について、水12(5)、三〇～三三頁
 - 15 " " 群馬県(1)、総説、水12(6)、六八～七〇頁
 - 16 " " (2)、渡良瀬河畔、水12(7)、三五～三七頁
 - 17 " " (3)、大間々扇状地、水12(8)、三七～四〇頁
 - 18 " " (4)、渡良瀬三角地帯、水12(9)、七一～七三頁
 - 19 " " (5)、赤城山の地下水、水12(10)、二四～二五頁
 - 20 " " (6)、赤城火山の地下水(1)、水12(11)、六七～六九頁
 - 21 " " (7)、榛名火山の地下水(2)、水12(12)、三〇～三三頁
- 昭和46年(一九七二)
- 1 神通川下流の水質汚濁(市川・原・渡辺・塚田と)、水処理技術12(1)、三一～三八頁
 - 2 日本における地下水の研究と問題点、水経済年報(一九七一年)、九三～一〇五頁

- 3 扇状地の水文学、扇状地（古今書院）、一五九～一八〇頁
 - 4 地下水の汚染について、資源調査会、防災388、地盤56
 - 5 水文地質図について、日本地下水学会誌19、五七～六三頁
 - 6 Water balance study of the ground water on the lower part of the R. Fuji, Sci. Rept. Tokyo Kyoiku Daigaku, Sec. C, 10 (101), 253～276.
 - 7 Artificial recharge in Japan, 水文地質学に於ける諸問題（IAHシンポジウム）
 - 8 国際地下水学会アジア地域会議について、IHD 15、三八～四三頁
 - 9 福井市における地下水の水文学的研究、東京教育大地理学研究报告XV、二五三～二七四頁
 - 10 現代地理学序説、地域研究14、13(4)、一～五頁
 - 11 富士山とその周辺の陸水、富士山総合学術調査報告書、富士急KK、一五一～二〇九頁
 - 12 日本の地下水―群馬県(8)、榛名火山の地下水(2)、水13(1)、六五～六七頁
 - 13 " " (9)、上毛の深井戸について、水13(2)、六二～六五頁
 - 14 " " (10)、利根川中流平野の不圧水、水13(3)、六八～七二頁
 - 15 " " ―埼玉県(1)、総説、水13(4)、六四～六八頁
 - 16 " " (2)、秩父盆地、水13(7)、七一～七四頁
 - 17 " " (3)、神流川右岸扇状地、水13(8)、六三～六六頁
 - 18 " " (4)、地下水研究の業績、水13(9)、七〇～七二頁
 - 19 " " (5)、中川低地帯、水13(10)、三二～三五頁
 - 20 " " (6)、坂戸・入間川扇状地、水13(11)、三三～三五頁
 - 21 " " (7)、東松山市、水13(12)、二六～二八頁
- 昭和47年（一九七二）
- 1 水文学の歴史と課題、水道公論8(1)、五八～六〇頁
 - 2 人工地下水、水道協会雑誌448、一一一～一二二頁
 - 3 Current studies of hydrology in Japan. 地理評45(2)、一六三～一七一頁

- 4 Artificial recharge in Japan, IAH Memoires 2, 111~116.
 - 5 水文学の開祖阿部謙夫先生、ハイドロロジー5、一~二頁
 - 6 Geohydrologic investigation for municipal water supply of city of Djakarta (with Takasuke SUZUKI), 41, 国建協・日水コン
 - 7 新居浜市における地下水の塩水化(予報)、東京教育大地理学研究報告XVII、九五~一二六頁
 - 8 Effects of Human Activity on Groundwater, Freiburger Geographische Hefte, Heft 12, 15~26.
 - 9 地下水人工涵養の実例、水処理技術13(12)、八一~九一頁
 - 10 一九七一年IAHアジア地域会議について、地学雑誌81(5)、一~三頁
 - 11 日本の地下水―埼玉県(8)、長野付近、水14(1)、二七~三〇頁
 - 12 " " " " (9)、荒川右岸台地、水14(2)、六三~六六頁
 - 13 " " " " (10)、荒川左岸台地、水14(3)、七三~七五頁
 - 14 " " " " (11)、荒川中流熊谷付近、水14(4)、三八~四一頁
 - 15 " " " " (12)、埼玉県の深層地下水、水14(6)、二七~三一頁
 - 16 " " " " (13)、武蔵野北東部、水14(7)、六四~六九頁
 - 17 " " " " (14)、続・武蔵野北東部、水14(8)、三二~三八頁
 - 18 " " " " (15)、所沢付近の宙水、水14(9)、七二~七五頁
 - 19 " " " " (16)、所沢付近の深層地下水、水14(10)、六八~七一頁
 - 20 " " " " | 東京都(1)、序説、水14(11)、七五~七七頁
 - 21 " " " " | 昭島市、水14(12)、二六~三〇頁
- 昭和48年(一九七三)
- 1 深層地下水の開発と利用、水利科学17(3)、一~一二頁
 - 2 Underground waste disposal and artificial recharge in Japan, UWM & AR 1, 60~71.
 - 3 Outline of the records of the Second Japanese Geographical Research Mission to the Northeastern Brazil, Tokyo Geogr. Papers, XVII, 1~8.

4 On the occurrence and quality of water in the semi-arid region of the Brazilian Northeast (NORDESTE) Tokyo

Geogr. Papers, XVII, 9~38.

5 On the groundwater province in the Brazilian Northeast, Tokyo, Geogr. Papers, XVII, 59~72.

6 日本の地下水—東京都(3)、武蔵野台地の地下水、水15(1)、六八~七二頁

7 " " (4)、三多摩地方(2)、帯水層について、水15(2)、六八~七二頁

8 " " (5)、武蔵野台地の地下水位、水15(3)、二九~三六頁

9 " " (6)、武蔵野台地における地下水の涵養機構、水15(4)、六四~六六頁

10 " " (7)、武蔵野台地の地下水の総括、水15(5)、六九~七一頁

11 " " (8)、離島の地下水、水15(6)、二八~三〇頁

12 " " (9)、八丈島、水15(7)、六二~六四頁

13 " " (10)、三宅島、水15(8)、二五~二九頁

14 " " (11)、神津島、水15(9)、六七~七一頁

15 " " (12)、新島、水15(10)、二一~二四頁

16 " " (14)、利島、水15(12)、八五~八七頁

昭和49年(一九七四)

1 A preliminary study on groundwater pollution, Sci. Rept. of Tokyo Kyoiku Daigaku, vol. 12 No. 115 pp. 63~73.

2 船橋市における地下水とその変動、教室報告、XJ II、一〇一~一二七頁

3 長野県下水内郡秋山郷における温水調査、同上、八一~一〇〇頁

4 地下水の基本的性格、日本学術会議水特別委シンポジウム

5 火山岩地帯における地下水調査、一九七四年日本地理学会予稿集

6 地下水汚染、水質汚濁会議シンポジウム

7 廃棄物地下処理と人工地下水の国際会議に出席して

8 ハイドロロジー6、一~三頁

9 地下水法の制定に関するシンポジウム、学術会議月報、一五~三頁

32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
"	"	"	"	"	"	"	"	"	日本の地下水 149—東京都(15)、青ヶ島、水 16 (6)、五七〇頁	水循環の立場からみた地下水利用のあり方(榎根と)、水利科学 97、四二〇五二頁	三重県の水資源開発、三重地理学会ニュース、No. 22、一六頁	矢作川流域の新しい水経営を考える(矢作川流域開発研究会第 8 回シンポジウム)	水文環境の破壊と水質汚濁、尾留川正平科研費報告(S・48)	地下水の流動と汚染、公害と対策、10、9、二〇一〇頁	木更津市地下水シミュレーション(木更津)	熊本市近傍地下水調査報告書(熊本県・市)	八千代市水支調査報告書(Ⅱ)(八千代市)	昭和 48 年度地下水汚染防止対策報告(環境庁)	水資源(震関環境講座)	我孫子市水源調査報告書(我孫子市)	大家庄は場整備地区調査報告書(富山県)	水循環の立場からみた地下水利用のあり方、水利科学 97、(18、2)、四二〇五二頁
158	157	156	155	154	153	152	151	150														
"	神奈川(1)、大磯町、水 16 (14)、二一〇二三頁	"	(22)、水 16 (13)、二六〇二八頁	"	"	"	"	"	(16)、小笠原島、水 16 (7)、八四〇八七頁	(17)、秋留盆地、水 16 (8)、二八〇二九頁	(18)、江東地区、水 16 (9)、二七〇二九頁	(19)、大栗川流域、水 16 (10)、三〇〇三六頁	(20)、" (2)、水 16 (11)、三六〇三九頁	(21)、水 16 (12)、七六〇七七頁	(22)、水 16 (13)、二六〇二八頁	(2)、相模野、水 16 (15)、六六〇六九頁						

昭和50年（一九七五）

- 1 広島市ぎ園町の地下水とその汚染（成瀬と）、地理科学22、五六～六一頁
- 2 池田湖の水収支について、教室報告X、一〇一～一一〇頁
- 3 Ground water in Manchuria, Sci. Rept. C 12～117 pp. 141～176.

4 地下水汚染の現状と対策（農技研）

- 5 関東地方における地下水の開発・使用・問題点について、日本大学地理学科五拾周年記念論文集、一二五～一二四頁
- 6 資源としての地下水を水文学的にどうみるか、水温の研究19、3

- 7 日本の地下水163—神奈川県(7)、湘南の工業用地下水、水17(6)、一六～一八頁

- 8 " 164— " (8)、横浜市の地下水(1)、水17(7)、三六～三九頁

- 9 " 185— " (9)、横浜市の地下水(2)、水17(8)、六八～七一頁

- 10 " 166— " (10)、秦野盆地の地下水(1)、水17(9)、三六～三九頁

- 11 " 167— " (11)、秦野盆地の地下水(2)、水17(10)、七〇～七二頁

- 12 " 168— " (12)、秦野盆地の水質について、水17(11)、六八～七〇頁

- 13 " 169— " (13)、酒匂川沿岸の地下水、水17(12)、三一～三三頁

昭和51年（一九七六）

- 1 水文学における最近の動向、応用物理45、1、六七～七三頁

- 2 Groundwater in Northeastern China II. Sci. Rept. sec. C 12～119, pp. 213～252.

- 3 地下水人工涵養の諸問題とヨーロッパの現状、施工技術六月号

- 4 人工地下水、施工技術、七月号

- 5 オーストラリア地理学の現状(1)(2)(3)、地理21、(7、8、9)

- 6 Study method of the groundwater on the volcano, IAH (Italy)

- 7 On the assesment of change of hydrological environments in the Naka River system, IHD～IGU (Moscow)

- 8 On the international cooperation of geography, IGU (Moscow)

- 9 国際地理学会と今夏のモスクワ大会、地理21、11、一二三～一二八頁
 - 10 人工地下水（未来技術）1、2、3、4、日経産業5、二六～二八頁
 - 11 日本の地下水170—神奈川県(14)、酒匂川沿岸の地下水、水18(1)、一六～一九頁
 - 12 " 171— " (15)、伊勢原付近の地下水、水18(3)、二四～二八頁
 - 13 " 172— " (16)、江の島の地下水、海老名付近の地下水、水18(4)、八一～八五頁
 - 14 " 173— " (17)、大磯丘陵中井村の地下水、水18(5)、二四～二六頁
 - 15 " 174— " (18)、戸塚付近の地下水、水18(6)、三五～三七頁
 - 16 " 175— " (19)、川崎市西生田の地下水、多摩丘陵北部七生の地下水、水18(7)、七四～七七頁
 - 17 " 176— " (20)、大磯丘陵南西部、水18(10)、七四～七七頁
 - 18 " 177— " (21)、箱根火山、水18(11)、八四～八六頁
 - 19 " 178— " (22)、湯河原・真鶴岬の地下水、水18(12)、一〇～一二頁
 - 20 中近東の地下水1、アラビアの地下水、水18(13)、七六～七九頁
 - 21 " 2、サウジアラビア(1)、水18(14)、八二～八四頁
 - 22 " 3、 " (2)、水18(15)、二〇～二三頁
- 昭和52年（一九七七）
- 1 Recent trend of land subsidence in Japan, Sci Rept. C 13～125 pp. 1～8.
 - 2 The development of geographical study of Tokyo Bunrika University and Tokyo Kyoiku University. Sci. Rept. C 13～125 pp. 9～33.
 - 3 大塚学園における水科学の発展、地理学研究報告XII二二～二二七頁
 - 4 Recent trend of land subsidence in Japan, IAHS Publ. No. 121 p. 9～15.
 - 5 Feasibility study of groundwater resources in Luzon Central Plain (フィリピン)
 - 6 水資源への提言、山形テレビ、01～04
 - 7 水源のない水道、日本水道新聞、05～27
 - 8 水問題ミステリー、水夏季増刊号

9 仙川分水工事鑑定書、東京高裁

10 巻頭言、ハイドロロジー 8・9

11 地下水の速さ、健康一〇月号 (No. 162)

12 第二回国際地盤沈下シンポジウム報告、環境庁

13 中近東の地下水 4、北エーメン (1)、水 19 (1)、二一〇二三頁

14 " 5 " (2)、水 19 (2)、二二〇二五頁

15 " 6 " イラク (1)、水 19、(3)、七六〇七七頁

16 " 7 " (2)、水 19 (4)、三二〇三四頁

17 " 8 " イラン (1)、水 19 (5)、七七〇七九頁

18 " 9 " (2)、水 19 (6)、一六〇一八頁

19 " 10 " (3)、水 19 (7)、二二〇二五頁

20 " 11 " (4)、水 19 (8)、二二〇二四頁

21 " 12 " (5)、水 19 (9)、一六〇一七頁

22 " 13 " エジプト (1)、水 19 (10)、二二〇二四頁

23 " 14 " (2)、水 19 (11)、三五〇三七頁

24 " 15 " (3)、水 19 (12)、三六〇三九頁

昭和53年(一九七八)

1 環境アセスメントとしての地下水調査の一手法について (田中・樫根と)、筑波の環境研究 3、一六二〇一六八頁

2 筑波研究学園都市およびその周辺における河川の流出特性 (第二報) (市川らと)、筑波の環境研究 3、一五七〇一六一頁

3 日本における水文学の発達、地評 51 7、五一七〇五二七頁

4 日本における地下水水文学の発展、地理 23 7、八七〇九三頁

5 長野県の地下水、特に北信について、小出武先生古稀記念論文集、七九〇九四頁

6 日本の地下水 179 長野県 (1)、甲信越について、水 20 (5)、三四〇三六頁

7 " 180 " (2)、菅平、水 20 (6)、二二〇二四頁

ある水文学者のクロノロジー

昭和55年 (一九八〇)	14	"	197	"	(20)	"	(5)	水21(12)、一五〇一八頁
	13	"	196	"	(19)	"	(4)	水21(11)、二二〇二四頁
	12	"	195	"	(18)	"	(3)	水21(10)、三四〇三九頁
	11	"	194	"	(17)	"	(2)	水21(9)、二〇〇二四頁
	10	"	193	"	(16)	松本市(1)、水21(8)、二四〇二六頁		
	9	"	192	"	(15)	"	(2)	水21(7)、三一〇三三頁
	8	"	191	"	(14)	美ヶ原、水21(6)、三二〇三四頁		
	7	"	190	"	(13)	八ヶ岳山麓、水21(5)、一五〇一八頁		
	6	"	189	"	(12)	"	(2)	水21(4)、八三〇八七頁
	5	"	188	"	(11)	八ヶ岳、水21(3)、一八〇二〇頁		
	4	"	187	"	(10)	"	(2)	水21(2)、二八〇二九頁
	3	日本の地下水186	長野県(9)、岡谷市、水21(1)、三三〇三五頁					
	2	地下水の利用と適正管理、国土建設の将来展望(建設省)						
	1	地下水の人工涵養、未来産業技術(科学技術広報財団)						
昭和54年 (一九七九)	15	"	17	"	(5)	水、一六〇一八頁		
	14	中近東の地下水16	エジプト(4)、水、三〇〇三三頁					
	13	"	186	"	(8)	"	(3)	水、三六〇三九頁
	12	"	185	"	(7)	"	(2)	水20(11)、三七〇三九頁
	11	"	184	"	(6)	上伊那(1)、水20(10)、		
	10	"	183	"	(5)	篠井扇状地、水20(9)、二二〇二四頁		
	9	"	182	"	(4)	飯絶火山、水20(8)、一八〇二四頁		
	8	日本の地下水181	長野県(3)、佐久盆地、水20(7)、一八〇二三頁					

1	地下水涵養とは、用水と廃水、一月号、五〇九頁
2	地下水の管理手法、地下水ハンドブック
3	那須扇状地の地下水、立正大学文学論叢67、一七〇三六頁
4	物部川左岸河口地域における地下水と養鰻業（植野ら六名と）、地域研究、21—1、三六〇四三頁
5	日本の地下水198—長野県(21)、松本盆地、水22(1)、一六〇一九頁
6	199—水質、水22(2)、二六〇三〇頁
7	200—木曾谷、水22(3)、六五〇六八頁
8	201—木曾谷、水22(4)、一六〇一九頁
9	202—茶臼山、水22(5)、一八〇二二頁
10	203—松代、水22(6)、一五〇一九頁
11	204—恵那山、水22(7)、一六〇一九頁
12	205—山梨県(1)、御勅使川扇状地(1)、水22(9)、一六〇一八頁
13	206—水22(10)、九二〇九四頁
14	207—水22(11)、三二〇三三頁
15	208—勝沼扇状地、水22(12)、八六〇八八頁

昭和56年（一九八一）

1	自然空隙の利用、土と基礎、29—1、一一〇一四頁
2	地下水の利用と管理、土木学会誌、1981—5、二九〇三二頁
3	日本の地下水210—山梨県(5)、金川扇状地(1)、水23(1)、八七〇九〇頁
4	211—水23(2)、二六〇二九頁
5	212—水23(3)、三四〇三九頁
6	213—水23(4)、二四〇二七頁
7	214—茅ヶ岳山麓、水23(5)、九一〇九五頁
8	215—甲府盆地(1)、水23(6)、八六〇八九頁

9	日本の地下水 216—山梨県(1)、甲府盆地(2)、水 23(7)、九〇～九三頁
10	" 217— " (12)、 " (3)、水 23(8)、七九～八一頁
11	" 218— " (13)、 " (4)、水 23(9)、七〇～七二頁
12	" 219— " (14)、富士北麓(1)、水 23(10)、三四～三六頁
13	" 220— " (15)、 " (2)、水 23(11)、五七～六〇頁
14	" 221— " (16)、 " (3)、水 23(12)、七一～七三頁
昭和57年(一九八二)	
1	御坊市の地下水(角と)、地域研究、23—1、一～六頁
2	四国地方における水面積(芳賀と)、地域研究、23—2、一五～二二頁
3	日本の地下水 222—静岡県(1)、富士東麓(1)、水 24(1)、三一～三四頁
4	" 223— " (2)、 " (2)、水 24(2)、三七～三九頁
5	" 224— " (3)、 " (3)、水 24(3)、三六～三九頁
6	" 225— " (4)、三島湧泉群、水 24(4)、六八～七一頁
7	" 226— " (5)、富士南西麓、水 24(5)、六六～六八頁
8	" 227— " (6)、富士南麓、水 24(6)、六七～六九頁
9	" 228— " (7)、富士川下流、水 24(7)、六六～六九頁
10	" 229— " (8)、富士川河口、水 24(8)、一八～二〇頁
11	" 230— " (9)、静岡地域、水 24(9)、八〇～八一頁
12	" 231— " (10)、 " (2)、水 24(10)、八一～八三頁
13	" 232— " (11)、 " (3)、水 24(11)、三二～三五頁
14	" 233— " (12)、 " (4)、水 24(12)、六一～六三頁
昭和58年(一九八三)	
1	ランドサットデータによる五六豪雪森林被害の調査(高島と)、森林航測139、日本林業技術協会
2	揚水試験の検討、地下水と井戸とポンプ 25—4、二～七頁

3	漏水の水文学、人文科学研究所年報第21号、五五～六四頁
4	関東地方の水面積について（寺山・水谷と）、地域研究24—2、二七～三三頁
5	日本の地下水 234—静岡県（13）、静岡地域（5）、水25（1）、八三～八五頁
6	235—“（14）、焼津市、水25（2）、六八～七二頁
7	236—“（15）、菊川地域、水25（3）、三一～三三頁
8	237—“（16）、三方ヶ原、水25（4）、七〇～七三頁
9	238—“（17）、大井川下流、水25（5）、三三～三七頁
10	239—“（18）、中遠（1）、水25（6）、三七～四〇頁
11	240—“（19）、“（2）、水25（7）、七〇～七二頁
12	241—“（20）、伊豆半島（1）、水25（8）、七八～八〇頁
13	242—“（21）、“（2）、水25（9）、七九～八一頁
14	243—“（22）、“（3）、水25（10）、三一～三四頁
15	244—“（23）、“（4）、水25（11）、二九～三一頁
16	245—“（24）、丹那断層と地下水、水25（12）、三二～三五頁